

【知事賞】受賞作品と選評

【短歌】

神迎ふ稲佐の浜に張られたる注連の新藁風に匂へり 大内 政江

旧暦10月に全国の神々が出雲大社へ参集すると云う古事によるもので稲佐の浜に上陸された神々が担がれてゆく情景には正に神聖で厳粛な雰囲気があり、そこに張られた注連の新藁の香も清々しい。特に今年は古事記編纂から1300年と言うけじめの年でもあって内容もこれに相応しい。

【俳句】

放牧の嘶き秋の風となる 大内 政江

放牧は馬・牛・羊などの家畜を放し飼いにすることであるが、嘶きと言えは馬の鳴き声なので、県下では隠岐島か三瓶山などの景であろうか。この句の良さは馬の嘶きから秋の風を感じたところにある。それは嘶きが春から夏、そして秋へと変化しているかのように読めるからである。又、目に見える「馬肥ゆる秋」も伏線となつていよう。いずれにしても風土性の句である。

【川柳】

ちっぽけな私を入れる多数決 松本 知恵子

一人では何も出来ない。世の中の不条理なことを嘆いていてもどうにもならない。これを多数決で正義が通るとすれば、ちっぽけな自分は願いが叶うのである。改めて多数決の力を考えさせられる、自分をよくみつめた句である。

【詩】

「飯盒」 佐藤 好野

山仕事(枝打ち)に出かけた昼休みに「飯盒」で「飯を焚」きながら、戦場での極限の生と死について息子に話しはじめた父は、「これ以上お前達に話せない」と言って、話の途中で「言葉を閉じ」てしまう。そして、枯れ木の燃える音だけが響く中で、父の無言と息子(作者)の戸惑いの時間が春の山間に流れていく……。全体の構成もしっかりとしており、各連のまとまりも良くできています。後半、息子の思いを直接的には書き込まずに、「飯盒」で「飯を焚く」父の姿をじっくりと見つめているところも印象深いものがあります。

【散文】

「由縁」 光岡 和子

主人公はある夏、東京から自分のルーツを探しに、亡き母の故郷へ旅する。石見の山村にある神社が母の実家で、そこを訪ねると偶然にも父と妹に再会し、ルーツを確認できた。鬼籍に入った母はいつも父について外国にいたりとか、祖父母は麻布の豪邸に住んでいると言っては真相をはぐらかしてきた。事実は、実父と腹違いの妹がいたのだ。目的を達した主人公は満足感に浸りながら都会へ帰っていく。フィクションを本当のように書く創作の面白さがある。

【ジュニア部門大賞】受賞作品と選評

【短歌】

吹雪の中一人立ち尽くす雪女さみしかろうとも言葉にできず 山尾 真奈

雪の降る夜に白い衣をまとい女の姿で現れる精霊を雪女と言い正にまぼろしである。淋しく悲しそうに見えるけれどさればとて慰める言葉もないという、女性的感性に勝れている。

【俳句】

ヒマワリと夕日に染まる楽器たち 澤田 真優

校庭など屋外での楽器演奏の場面であろう。ヒマワリも夕日も黄金色なら楽器は管楽器が似合う。句は楽器に焦点をあてているが、演奏する生徒たちのはじけるような笑顔がうかぶ。一読平明な表現ながら、色彩感覚・構図・背景などすぐれた作品である。

【川柳】

目をつむり宇宙の鼓動聞いている 善浪 大雅

まぎれもなく詩人である。五七五のリズムの中にそこはかとなく詩が漂っている。座禅を組み目をつむり悠久の宇宙に身を解き放ちそこに心を遊ばせるとき、宇宙の鼓動が聞こえてくる。そんな大人のような気持ちを爽やかに詠んでいる。